

平成30年度 東京都小学校英語教育研究会 年間計画案

1. 研究主題

コミュニケーションを図る基礎を育む指導の工夫

－ 中学年の必修化、高学年の教科化に向けて－

2. 主題設定の理由

平成23年度から始まった小学校の外国語活動は、外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養うことをねらいとして各学校で展開されている。

2020年度から実施される新学習指導要領では、育成すべき資質・能力の観点から内容が整理され、3・4年生での外国語活動、5・6年生で教科としての英語が始まるなど大きく内容も変わってくる。それによって各学校でも今までの外国語活動を見直し、新学習指導要領の主旨を反映した授業に変えていくことが大きな課題となっている。

また、東京都教育委員会でも、小学校教員・中学校英語科教員の短期留学、英語指導力の向上を目指した資格取得の研修、独自の教科書や教材の策定、CAN-DOリストによる適切な評価等の提言、英語村の開設など、東京オリンピック・パラリンピックの開催前に英語教育を推進する施策を打ち出している。英語教育への機運がますます高まってきている。

今年度は、上記の内容を踏まえ、昨年度に引き続き、研究主題を「コミュニケーションを図る基礎を育む指導の工夫」とし、副主題として「中学年の必修化、高学年の教科化に向けて」とし、新学習指導要領における内容を具現化する取り組みを行う。そのためこの主題に合わせた講演会、ワークショップや演習、授業研究に取り組んでいく。

本研究会では、都の研究推進団体の認定を受け、教科化を念頭に教員や英語担当者の英語活用能力の向上を図り、外国語活動、英語の指導力を高めるために、研修・研究を行ってきた。今後は、区市町村の研究団体や都中学校英語教育研究会、民間を含め英語教育にかかわる組織とも連携し、学習指導要領の主旨に沿う研修や研究を推進する研究団体を目指していく。

3. 具体的な研究内容

① *CLIL 形式を取り入れた授業開発

高学年になると、知的好奇心が旺盛になることも関係し、英語の歌は、大きな声で歌わなくなったり、単純なゲームには興味を示さなくなったりする状況が見られる。そこで、他の教科や領域との関連を図ることにより、知的好奇心を満たし、英語学習への関心も高めることができると考える。何より、CLIL 形式の学習を取り入れることは、多くの教科を受け持っている小学校担任の大きな特性の活用になると考える。今年度も CLIL 形式学習を取り入れた授業を開発し、提案していく。

★CLIL とは、Content and Language Integrated Learning（内容言語統合型学習）の略語で「クリル」と読む。社会や理科などの教科や領域と言語（非母語）の両方の内容を学ぶ教育方法。近年、欧州の外国語教育で広く取り入れられ、日本でも注目されている。

② 外国語活動における小中連携

小学校での外国語活動が第3学年から始まり、第5・6学年では週2時間を教科として行うことになると、今まで以上に、中学校との連携が重要になってくる。小学校で学習したことが、中学校での外国語科とつながっていくために、どのような指導計画を作り、指導や評価（パフォーマンス評価など）をどのようにしていけばよいかを都中学校英語教育研究会との連携も深めて研究していく。

③ 外国語4技能の評価（聞く・話すの技能、読む・書くの関心）

新学習指導要領では、外国語の教科化にあたり、4技能の習得を目指している。特に「聞く」「話す（やりとり・発表）」では、基礎的な技能の習得を目標としている。技能における具体的な評価方法、また中学校における評価との連携、「読む」ことや「書く」ことの活動における評価規準の設定について研究をし、提案していきたい。

④ 外国語科でのアルファベットの習得

文字指導による習得にとどまらず、聞くことや話すことの活動の中で、親しみながらアルファベットの習得をしていけるように、具体的な場면을提案。紹介できるよう研修や研究授業などで示していく。

⑤ 東京独自教材の Welcome to Tokyo の活用

オリンピック・パラリンピック教育との関連から、外国語活動において活用できる具体的な場面、学年における指導計画の位置づけの例などを示していけるよう研究していく。特に、今年度は、中学年用に新しく出された Welcome to Tokyo Beginner の使用例について研修を計画している。